

図書館の徹底活用術②⑥

社会文化的アプローチとしての知の伝承への着眼：レイブ&ウエンガー (Lave, J & Wenger, E) 『状況に埋め込まれた学習 (Situated Learning : Legitimate Peripheral Participation)』を巡って 枝元 益祐

皆さんの学習支援の為に、図書館サービスの有用な活用方策についての近接領域を毎回紹介しています。今回は、マイケル・ポラニー (Michael Polanyi) が『暗黙知の次元』で言及した「知の在り方」を捉える側面を継承しつつ、ドロシー・レナード (Dorothy A. Leonard) に着眼しました。そこでは、Dorothy A. Leonard の著書『「経験知」を伝える技術：ディープスマートの本質』を引き合いに出しながら、職業も含んだ生活経験で展開される実践活動から生成する「経験知」に着眼しました。この「経験知」が他者へ伝承されるプロセスに関して重要になるのが、ディープスマート (Deep Smarts) として人間の内に根ざした匠の技のようにミメシスとして身体化され会得された「知の在り方」でした。

今回は、この概念を深化させるために、レイブ & ウエンガー (Lave, J & Wenger, E) 『状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加者 (Situated Learning : Legitimate Peripheral Participation)』 (産業図書、1993年) に着眼したいと思います。人が学ぶということの本質は、実際の世の中の職業などを念頭に置いた際に、その業務に従事する中から生成する知を見に纏うことにあると規定しています。われわれの身の回りのあらゆる仕事は、直接的・間接的に多種多様な関連性の中で相互作用しながら営まれている実践コミュニティの中に存在しているということが出来ます。

「『学習』を個人の頭の中ではなく、まさに共同参加の過程の中に、意味生成と個々の発話者の頭の中から離れて、社会的相互作用の場の中に位置づける (p.6)」と規定されるように、このような実践コミュニティに於いて、学習者は

社会文化的な文脈から切り取られた知識体系を伝達され、身に付ける存在としては指定されていません。学習者とは、それぞれの実践コミュニティに参加する存在であり、その参加を通じて状況に埋め込まれた経験による学習を展開する存在とされています。

その実践コミュニティへの新規参入者 (新しくメンバーになった人) は、熟達した一人前の参加者 (十全的参加者) のレベルの仕事の内容や責任には達していないので「周位的」であると同時に、そのような周位的参加者であっても実践コミュニティが内包する種々の資源や機会にアクセスする正統な権利が担保されている「正統的」でもあるといえます。つまり、「正統的」とは、ある共同体に所属している (p.10) を意味しています。このような新規参入者の部分的参加は当該の実践活動から「切り離された」ものではなく、その周辺性は熟達するに伴って次第にミメシス形成されることで、理解の資源へのアクセスを遡増していくことが念頭に置かれています。

ある実践コミュニティの中で、新しい参加者が熟達し一人前になる過程は、その共同体に於いて新規参入者がアイデンティティを獲得していく過程であり、同時に、新しい参加者がベテラン化していく共同体の再生産のプロセスでもあるといえます。

このような社会的な文脈を援用すれば、図書館を活動したり、使いこなす能力は、「切り取られた知識の伝達」ではなく、図書館という実践コミュニティに参加することの中から生成する「知の在り方」であるということが出来ます。

えだもと ますひろ (准教授・図書館学・教育学)